

1. 序論

本発表では、南琉球宮古多良間方言（以下、多良間方言）におけるピッチ上昇の記述をおこなう。従来、多良間方言はピッチの下降の有無と位置が弁別的な三型アクセント体系と記述されてきた（松森 2014；五十嵐 2015；青井 2016）。ところが、第3節でレビューするように、いくつかの環境においてはピッチの上昇が観察されることが五十嵐（2015）や松森（2016）によって指摘されている。しかし、このピッチ上昇が、どのような条件で、どのような位置に、そしてなぜ生じるのかはまだ十分に明らかにされていない。そこで本発表では、五十嵐と松森の記述に私自身のデータを新たに加え、その記述と考察をおこなう。

2. 多良間方言のアクセント体系

多良間方言の名詞は、(1) のように、韻律句（語根（+接語）が写像される韻律単位。いわゆる文節）内におけるピッチの下降の有無と位置によって3つの型が区別される三型体系を有する（松森 2014；五十嵐 2015）。

(1) 多良間方言における名詞アクセントの3つの型の区別¹（“ \downarrow ” はピッチの急激な下降を表す。以下同様）

- a. 下降1型 (F1) : $\text{madu}=\text{mai} \dots$ 「暇も…」 $(\text{ma}\downarrow\text{du})_{\text{PWd}}(\text{mai})_{\text{PWd}} \dots$ 名詞 madu の次末モーラで下降
- b. 下降2型 (F2) : $\text{jadu}=\text{mai} \dots$ 「戸も…」 $(\text{jadu})_{\text{PWd}}(\text{ma}\downarrow\text{i})_{\text{PWd}} \dots$ 助詞 $=\text{mai}$ の次末モーラで下降
- c. 平板型 (F0) : $\text{juda}=\text{mai} \dots$ 「枝も…」 $(\text{juda})_{\text{PWd}}(\text{mai})_{\text{PWd}} \dots$ 韻律句内に下降なし

表層形のピッチパターンから、3つの型をそれぞれ下降1型 (F1 型)、下降2型 (F2 型)、平板型 (F0 型) と呼ぼう²。3つの型のピッチパターンは (2) のように記述できる（松森 2014；五十嵐 2015；青井 2016）。

(2) 多良間方言の3つのアクセント型のピッチパターン

- a. 下降1型 (F1) : 韻律句の左から1つ目の韻律語の次末モーラで下降する。
- b. 下降2型 (F2) : 韻律句の左から2つ目の韻律語の次末モーラで下降する。
- c. 平板型 (F0) : 韻律句内部に急激なピッチの下降がない。

多良間方言のアクセントを記述するためには、モーラに加えて、韻律語（prosodic word; PWd）を参照する必要がある（松森 2014；五十嵐 2015；青井 2016）。韻律語は、モーラと韻律句の間に位置する、2モーラ以上の語根および接語が写像される韻律単位である（五十嵐 2015: 9）。本稿では、(1) に示したように、韻律語境界を“()_{PWd}”によって表わす。

2モーラの長さに満たない語（具体的には1モーラ接語）は直前の語根ないし接語と1つの韻律語を形成

¹ 例文中の“=”は接語境界、“+”は語根境界を表す。

² 松森（2014）および五十嵐（2015）は、琉球祖語に想定される3つのアクセント型（系列）との対応関係から、各型をA型、B型、C型と呼んでいる。本発表で用いる名称との対応は以下の通りである：下降1型(F1)=C型、下降2型(F2)=B型、平板型(F0)=A型。

する。たとえば F1 型の名詞に 1 モーラ接語 =nu (主格) が付加されたときは、韻律語は (madu]nu)_{PWd} のように形成され、下がり目は当該名詞の次末モーラではなく最終モーラに現れる ((1a) と比較してほしい)。

3. 先行研究

第 2 節で見たように、多良間方言のアクセントはピッチの下降が有意義な体系であるとこれまで記述されてきた。ところが 2 つ以上の韻律句が連続する環境において、ピッチの上昇が観察される場合がある。

3.1 五十嵐 (2015)

五十嵐 (2015: 35) は属格助詞 =nu を伴う名詞句 X=nu Y「X の Y」において、ピッチの上昇が観察される場合があると述べている (なお五十嵐は当該名詞句を「X=nu Y 構造体」と呼んでいる)。

(3) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターン (五十嵐 2015: 36。“[” はピッチ上昇を表す。以下同様)

- | | |
|--|---|
| a. X=F1 型 × Y=F1 型 : funi=nu utu=mai ... 「舟の音も…」 | (funi]nu) _{PWd} (utu) _{PWd} ([mai] _{PWd} |
| X=F1 型 × Y=F2 型 : nuuma=nu jaa=mai ... 「馬の家も…」 | (nu:ma]nu) _{PWd} (ja:] _{PWd} ([mai] _{PWd} |
| X=F1 型 × Y=F0 型 : tamana=nu paa=mai ... 「キャベツの葉も…」 | (tamana]nu) _{PWd} (pa:] _{PWd} ([mai] _{PWd} |
| b. X=F2 型 × Y=F1 型 : ami=nu utu=mai ... 「雨の音も…」 | (aminu) _{PWd} (u]tu) _{PWd} (mai) _{PWd} |
| X=F2 型 × Y=F2 型 : midum=nu jaa=mai ... 「女の家も…」 | (maminu) _{PWd} (ja:] _{PWd} (mai) _{PWd} |
| X=F2 型 × Y=F0 型 : mami=nu paa=mai ... 「豆の葉も…」 | (maminu) _{PWd} (pa:] _{PWd} (mai) _{PWd} |
| c. X=F0 型 × Y=F1 型 : kadi=nu utu=mai ... 「風の音も…」 | (kadinu) _{PWd} (u]tu) _{PWd} (mai) _{PWd} |
| X=F0 型 × Y=F2 型 : usi=nu jaa=mai ... 「牛の家も…」 | (usinu) _{PWd} (ja:] _{PWd} (mai) _{PWd} |
| X=F0 型 × Y=F0 型 : pir=nu paa=mai ... 「にんにくの葉も…」 | (pi]nu) _{PWd} (pa:] _{PWd} (mai) _{PWd} |

「X=nu Y 構造体」におけるピッチパターンの特徴として、まず五十嵐 (2015) が指摘しているのは、Y のアクセント型の区別が失われている点である。たとえば (3b) の 3 つの構造体は Y のアクセント型がすべて異なるが、構造体全体のピッチパターンは 3 つのあいだで違いがなく、すべて構造体の 2 つ目の韻律語内部で下降するピッチパターンで実現される。これは、言い換えれば、Y のアクセント型の区別は、構造体全体のピッチパターンの決定に関わらないということである。

X と Y はそれぞれアクセントを持つ名詞語根であり、X=nu と Y=mai はそれぞれ別の韻律句を成す。このとき Y のアクセントは実現することが予測されるが、実際にはそうならない。「X=nu Y 構造体」のピッチパターンの実現において、Y のアクセント型が無視されるというのは、複合名詞のアクセントの実現と類似した特徴である。すなわち、多良間方言において、複合名詞 X+Y のピッチパターンは前部要素 X のアクセント型によって決定され、後部要素 Y のアクセント型は無視される (松森 2014 ; 五十嵐 2015)。

一方、複合名詞では観察されないような特徴的なピッチパターンも観察される。まず注目すべきは X が F1 型のときのピッチパターンである。このとき助詞 =mai「も」の直前にピッチの上昇が現れる (五十嵐 2015: 37)。また X が F0 型のときのピッチパターンにも特徴的な点が見られる。すなわち X が F0 型のとき、構造

体の左から2つ目の韻律語でピッチの下降が生じる（そしてその結果 F2 型と中和する）（五十嵐 2015: 37）。

助詞 =mai「も」の直前でのピッチ上昇は、X が F2 型の複合名詞であるときにも観察される（なお X が F1 型であるときにも同じ位置にピッチ上昇が観察される）。

(4) 「X=nu Y 構造体」のピッチパターン（X が複合名詞の場合）（五十嵐 2015: 37。Y は F0 型に統一）

a. X=F1 型 × Y=F0 型 : waa+msju=nu kada=mai ... 「豚味噌の匂いも…」

(wa:]_{PWd}(msⁱunu)_{PWd} (kada)_{PWd}([mai]_{PWd}

b. X=F2 型 × Y=F0 型 : avva+msju=nu kada=mai ... 「油味噌の匂いも…」

(avva)_{PWd}(msⁱu]nu)_{PWd} (kada)_{PWd}([mai]_{PWd}

c. X=F0 型 × Y=F0 型 : guma+msju=nu kada=mai ... 「胡麻味噌の匂いも…」

(guma)_{PWd}(msⁱunu)_{PWd} (ka]da)_{PWd}(mai)_{PWd}

(3b) と (4b) の比較から、Y を含む韻律句内にピッチ上昇が現れるかどうかは、X を含む韻律句内に F2 型のアクセントによるピッチ下降が実現するか否かが関わっていると考えられる。すなわち F2 型のアクセントは、(3b) のように、韻律句内に韻律語が1つしか含まれない場合には実現されない（松森 2016; 青井 2016b）。

五十嵐 (2015) は「X=nu Y 構造体」の観察から、ピッチ上昇が現れる条件として、①（高く実現される）助詞 =mai「も」を含む韻律語に先行する韻律語全体が低く実現され、かつ②その低く実現される韻律語が、高く実現される助詞とともに、単一の韻律語を構成すること³の2つを示唆している。しかしどのような条件でどのような位置にピッチの上昇が現れるのかを明らかにするのは今後の課題であるとしている。

3.2 松森 (2016)

松森 (2016) は、多良間方言における複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの初期的な記述をおこなった研究である。その過程で、アクセント核でピッチの（下降ではなく）上昇が生じる場合があることを報告している。松森によれば、ある韻律句がアクセント核を有するとき、当該韻律句より以前にアクセント核によるピッチ下降が実現されている場合に、アクセント核で（ピッチの下降ではなく）ピッチの上昇が観察される。(5) に松森の例を引用する（ただし表記は改めた。なお“*”はアクセント核を表す）。

(5a) を見ると、1つ目のアクセント核を含む韻律句 (joonna*a「ゆっくり」) では下降が生じているのに対し、それに続く2つ目のアクセント核を含む韻律句 (katami*i butar「運んでいた」) では上昇が生じている。また (5b, c) のようにアクセント核を含む韻律句が3つ続く場合には、3つ目のアクセント核を含む韻律句でふたたび下降が生じている。

(5) の現象を記述するために、松森 (2016) は従来のアクセント規則を「アクセント核を持つモーラの直後のモーラから、韻律句末のモーラまでに隣の音調とは反対の音調を付与せよ」のように修正することを提案している（松森はこの規則を「音調逆転規則」と仮称している）。すなわち、それまではアクセント核によっ

³ たとえば upusju+kami=nu ui=n ... 「海水用の瓶の上に… (upusju「海水」=F1 型)」のように修飾語を含む韻律句に1つの韻律語しか含まれない場合、条件①を満たしていたとしても、ピッチの上昇は現れない ((4a) と比較してほしい) : (upu]sⁱu)_{PWd}(gaminu)_{PWd} (uin)_{PWd}

(5) 複数の韻律句が連続する場合のピッチパターン(松森 2016: 3。“H” は高ピッチ、“L” は低ピッチを表す。)

- a. pir=mai joonna*a katami*i butar 「昼もゆっくり運んでいた。」
[H] [H L] [L H]
- b. kjuu=ma*i joonna*a katami*i butar 「今日もゆっくり運んでいた。」
[H L] [L H] [H L]
- c. kinu*u=mai joonna*a katami*i butar 「昨日もゆっくり運んでいた。」
[H L] [L H] [H L]

て「下がり目」が指定されていると考えられてきたが、アクセント核によって指定されているのは「隣の音調と反対である」ことだと考えたのである。

松森 (2016) の修正案は、ピッチの下降が有意味であると考えられてきた多良間方言のアクセントについて再考を促す重要な指摘である。しかしながら、ピッチ上昇の実現位置に関して誤った予測をしてしまう点で問題が残る。すなわち、松森はピッチの下降と上昇はどちらもアクセント核のあるモーラとその直後のモーラのあいだで生じるというように記述しているが、第4節で記述するように、実際にはピッチの下降位置と上昇位置は互いに異なる位置に現れる。

4. 記述

観察のための録音資料は2016年7月～8月に現地調査で収集した。協力者は男性1名(1935年生・字塩川出身⁴)である。録音機器は marantz PMD661、マイクは AKG C520 を使用し、サンプル周波数 44.1 kHz 16 bit、WAV 形式で録音した。録音には (6) の3つの粹文を用いた。α/β/γには表1の調査語彙がそれぞれ入る。

(6) 調査で用いた粹文

- a. uja=kara=mai α=kara=mai kii. 「父からもαからも聞いた。」(uja「父」=F1型)
- b. adan+kii=mai β+kii=mai miitar. 「アダンの木もβの木も見た。」(adan「アダン」=F1型)
- c. waa+msju=mai γ+msju=mai fuutar. 「豚味噌もγ味噌も食べた。」(waa「豚」=F1型)

表1 調査語彙

(6) の各文の1つ目 の韻律句に含まれる名 詞語根(それぞれ uja 「父」、adan「アダン」、 waa「豚」) はすべて F1	F1 型	F2 型	F0 型
調査語彙 α	anna 「母」	midum 「妻」	ffa 「子」
調査語彙 β	gazima 「ガジュマル」	mami 「豆」	kuba 「クバ」
調査語彙 γ	zimami 「ピーナッツ」	avva 「油」	guma 「胡麻」

型であり、各語根内部に下降が生じるピッチパターンを持つ。

ピッチの観察は Praat (ver. 5.4.01) を用いておこなった。調査語彙を含む韻律句にピッチの上昇があるかど

⁴ 多良間方言には大きく分けて塩川変種と仲筋変種の2つの変種が認められる。アクセント体系に関して、両変種のあいだに目立った差異は(少なくとも現時点では)報告されていない。

うか、あるとしたらどの位置に現れるか、をとくに観察した。観察の結果は (7) のように要約できる。

(7) 観察結果の要約：多良間方言におけるピッチ上昇

- a. ピッチの上昇は $\alpha/\beta/\gamma$ のアクセント型が下降型 (F1 型・F2 型) のときに生じる。
- b. ピッチの上昇は下降が予測される位置よりも 1 モーラ右に現れる。

具体例として (6b) の枠文を使用して収集した例文を (8) に挙げる (下線部を引いた調査語彙 β を含む韻律句のピッチパターンに注目してほしい)。また各例文の F0 曲線を図 1 示す (図中の “↓” はピッチ下降の位置、“↑” はピッチ上昇の位置を示す)。

(8) 枠文 (6b) によって収集した具体例 (adan 「アダン」 = F1 型)

- a. β = F1 型 : adan+kii=mai gazima+kii=mai ... 「アダンの木もガジュマルの木も…」

(ada)n_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} (gazima)_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} ... 後部要素 kii の直前でピッチが上昇

- a'. 文頭の場合 : gazima+kii=mai ... (gazi)ma_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} ... 前部要素 gazima でピッチが下降

- b. β = F2 型 : adan+kii=mai mami+kii=mai ... 「アダンの木も豆の木も…」

(ada)n_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} (mami)_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} ... 助詞 =mai の直前でピッチが上昇

- b'. 文頭の場合 : mami+kii=mai ... (mami)_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} ... 後部要素 kii でピッチが下降

- c. β = F0 型 : adan+kii=mai kuba+kii=mai ... 「アダンの木もクバの木も…」

(ada)n_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} (kuba)_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} ... ピッチ上昇なし (全体が低ピッチで実現)

- c'. 文頭の場合 : kuba+kii=mai ... (kuba)_{PWd}(gi:)_{PWd}(mai)_{PWd} ... ピッチ下降なし (全体が高ピッチで実現)

まずピッチ上昇の有無について比較しよう。すると、まず (8a, b) のように β が下降型のときには β を含む韻律句内にピッチの上昇が現れるのに対して、(8c) のように β が平板型のときにはピッチ上昇が現れないことがわかる。

ピッチ上昇の位置は次の通りである

(図 1 の “↑” の位置に注目してほしい)。すなわち、 β が F1 型である (8a) では、複合名詞の前部要素 gazima 「ガジュマル」が低く実現されたのち、後部要素 kii 「木」の直前でピッチが上昇する。一方、(8b) のように β が F2 型であるときには、複合名詞 mami+kii 「豆の木」全体が低く実現され、助詞 =mai 「も」の直前でピッチが上昇する。

(8b) と (8c) のピッチ上昇位置の違いは、松森 (2016) が示唆しているように、アクセント型の違い (つまりアクセント核の位置の違い) を反映していると考えられるだろう。ただし (8) で観察されたピッチ上昇の位置は、ピッチ下降が予測される位置とは異なっている。すなわちピッチ下降は、(2) に示したよ

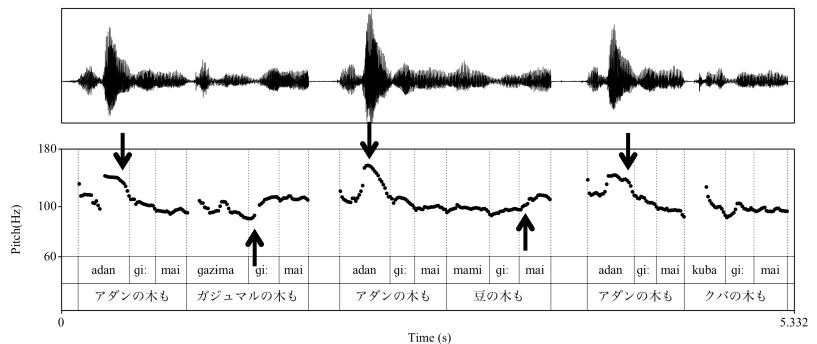


図 1 (8a)~(8c) の基本周波数曲線

うに、韻律句の左から1つ目(F1型の場合)もしくは2つ目(F2型の場合)の韻律語の次末モーラに現れる(比較として(8a', b'))に挙げた例も参照してほしい)。したがって、ピッチの上昇は、ピッチ下降が予測される位置よりも1モーラ右に現れると一般化することができるだろう。

「ピッチ上昇の位置は下降が予測される位置よりも1モーラ右である」と言う一般化は、次のように仮定することで、五十嵐(2015)が記述した「X=nu Y 構造体」のピッチパターンにも適用できる。すなわち、(3a)のピッチ上昇と(3b, c)のピッチ下降(もしくは(4a, b)のピッチ上昇と(4c)のピッチ下降)は、いずれも被修飾語Yに置かれたアクセントによるものと考えるのである⁵。もう一度(3)の例文を比較してほしい。(3a)では助詞=mai「も」の直前にピッチ上昇が観察されるのに対して、(3b, c)では助詞=maiに前接する名詞の次末モーラにピッチ下降が観察される。つまり(3b, c)に観察される下降の位置と(3a)に観察されるピッチ上昇の位置を比べると、上昇位置は下降位置よりも1モーラ右に置かれていると言える。

5. 結論と今後の課題

本発表では、多良間方言のピッチ上昇に関する記述をおこなった。多良間方言はピッチ下降の有無と位置が有意味な三型アクセント体系を有すると考えられてきたが、五十嵐(2015)や松森(2016)によって、同方言にピッチの上昇が観察される場合があることが明らかにされた。両研究のレビューと本発表の記述から、多良間方言のピッチ上昇の特徴は次のように要約できる。すなわち、①ピッチ上昇が生じるのは必ず2つ目以降の韻律句である；②ピッチ上昇が実現するためには、当該韻律句よりも前の句でピッチ下降が実現していることが必要である；③ピッチ上昇が生じる位置は下降が予測される位置の1モーラ右である。

多良間方言におけるピッチの上昇を記述するために、松森(2016)は「音調逆転規則」を提案した。しかし松森のこの規則では、本発表で観察したピッチ上昇を妥当に記述することができない。すなわちピッチ上昇が出現する位置はピッチ下降が出現する位置よりも1モーラ右にあり、したがってアクセント核の直後のモーラから反対の音調を付与せよと言う上記の規則では、同じアクセント核によって指定されているはずのピッチの下がり目と上がり目が一致しない。

今後の課題として次の2点が挙げられる。すなわち、ピッチの下降と上昇の交替が生じるドメインを明らかにすること、そしてそのメカニズムを明らかにすることである。以上の問題を明らかにするためには、五十嵐(2015: 40)が提起しているように、より広範なデータの蓄積が必要である。

謝辞 本発表は、日本学術振興会科学研究費補助金「関係性に着目した宮古語音韻構造の探究」(平成26~28年度)の助成を受けている。**参考文献** 青井隼人(2016a)「南琉球宮古語多良間方言の音声学的・音韻論的構造の諸相」東京外国語大学大学院2016年度博士論文/青井隼人(2016b)「宮古語多良間方言のアクセント型の中和」琉球諸語記述研究会第10回研究発表会(2016.9.25、於九州大学)/五十嵐陽介(2015)「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文学研究』8: 1-42/松森晶子(2014)「多良間島のアクセント規則を再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』63: 13-36/松森晶子(2016)「多良間島における文のプロソディー：韻律句が連なる場合の音調交替現象について」国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」キックオフワークショップ(2016.1.11、於国立国語研究所)。

⁵ 被修飾語Yにアクセントが置かれると言う仮説の妥当性については、今後さらなるデータを蓄積した上で検証が必要である。